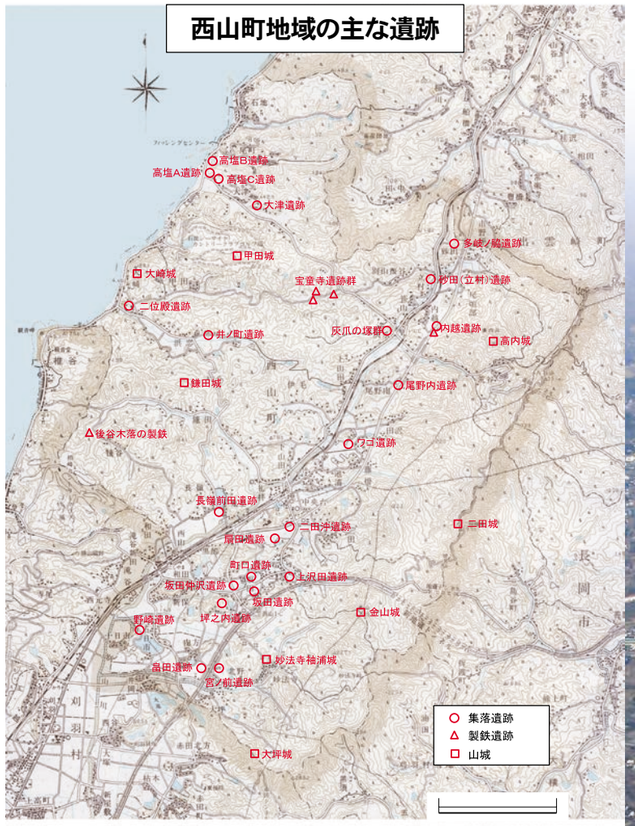
年代	時代		歴史上の出来事	西山の遺跡
10000	旧石器時代			
	縄文	草創期	土器や弓矢が使われる	
		早期		
		前期		高塩A遺跡・多岐ノ脇遺跡
		中期	火焔型土器が流行する	坪之内遺跡・大津遺跡
		後期		野崎遺跡
		晩期		
BC	弥生	前期	稲作や金属器が伝わる	
AD		中期		
		後期		内越遺跡・坪之内遺跡・野崎遺跡
	古墳	前期	古墳が作られる	高塩B遺跡・町口遺跡
		中期		坂田仲沢遺跡
		後期	大和政権の統一が進む	畠田遺跡・二田沖遺跡
600	飛鳥		仏教が伝わる	
700			草生水を献上する	
	奈良		奈良に都が移る	井ノ町遺跡
800	平安		京都に都が移る	井ノ町遺跡
				坂田遺跡
				宮ノ前遺跡
1200	鎌倉		源頼朝が幕府を開く	上沢田遺跡・宮ノ前遺跡
				宝童寺遺跡群
1300				町口遺跡
	室町		足利尊氏が幕府を開く	
1400				
			応仁の乱	宮ノ前遺跡
1500			上杉謙信	町口遺跡
	安土桃山		豊臣秀吉が天下を統一	甲田城
1600			関ヶ原の戦い	
	江戸		徳川家康が幕府を開く	
			天明義民	
			灰爪の役（戊辰戦争）1868	灰爪の塚群



「遺跡が語る西山の歴史」と題して、ここまで、縄文時代から江戸時代の終わりまでの様々な遺跡を紹介してきました。海岸に近い石地の高塩遺跡群では縄文時代の比較的早い時期から人々が活動していました。豊かな自然に囲まれたこの地域は、狩猟や採集などにより生活していた縄文時代の人々に、豊かな生活の糧をもたらしたのでしょう。この豊かな自然は現代にまで引き継がれてきました。

弥生時代には、米作りが始まることで平野部の開発が始まったようです。別山川などがもたらす豊富な水は、当時から貴重なものであるとともに、肥沃な土地が豊かな収穫をもたらしたと思われます。大きなヒスイ製の勾玉が出土したことは、豊かな実りに支えられた権力者の出現の証かもしれません。同時に、戦乱の時代にも巻き込まれていきました。その後、古墳時代から古代、中世を通じてこの地域の開発はますます進展していきます。開発は耕作地ばかりではなく、山の中の大製鉄遺跡にまで及びます。山の資源を大量に消費する製鉄を行うには、これを支える強い権力が関与しているのかもしれません。また、軽井川南遺跡群などとの関係も検討が必要です。地域を支配する人が住んだと見られるような、堀を持つ館の存在も明らかとなりました。戦国時代には、また戦乱の時代に巻き込まれていきます。実際に戦争に巻き込まれた山城の様子も見えてきました。

広い柏崎市域では、地区によって様々な歴史をたどってきています。西山の歴史が柏崎市の歴史の中でどのように位置付けられるのか、これからさらに検討していかなければいけません。これまで紹介した遺跡は、全ての範囲が調査されているわけではありません。また、この他にもまだまだ多くの遺跡が眠っていて、私たちの知らない歴史をこれからも語ってくれるのです。この貴重な遺跡を、私たちが後世に大事に引き継いでいくことが必要とされるのです。

柏崎市制施行70周年記念　考古資料企画展
遺跡が語る西山の歴史
発　行／柏崎市教育委員会（柏崎市中央町5-50）　発行日／平成22年10月
編　集／柏崎市遺跡考古館（柏崎市小倉町7-18）　印　刷／株式会社 小　田

柏崎市制施行70周年記念　考古資料企画展

遺跡が語る西山の歴史

主催：柏崎市教育委員会
共催：（財）柏崎市観光レクリエーション振興公社
（柏崎ふるさと人物館・柏崎市立博物館）

開催にあたって

この度、柏崎市制施行70周年記念事業として、考古資料企画展「遺跡が語る西山の歴史」を開催することとなりました。

柏崎市内では現在980箇所の遺跡が見つかっており、近年の開発事業に伴って多くの発掘調査が行われてきました。発掘調査の成果の中には、それまでの歴史に対する認識を大きく変えさせるものも数多くありました。しかし、それぞれの成果から歴史を組み立てていくことは容易なことではありません。

今回は、柏崎市西山町という一つの地域に注目して、遺跡から地域の歴史を振り返ってみようと思います。当該地域では、今から約6千年前にさかのぼる高塩C遺跡で最古の人の営みが始まっていることが確認されています。

西山町地域の皆様はもとより、広く市内外の方々に西山の風土を育んできた歴史や文化を感じていただくことを通して、埋蔵文化財を含めた文化財保護の重要性をあらためてご理解いただければ幸いです。

最後に、今回の企画展の開催にあたって共催いただいた（財）柏崎市観光レクリエーション振興公社、資料の出品や展示に協力をいただいた柏崎市立博物館、柏崎ふるさと人物館など御指導・御協力を賜りました関係各位に心から御礼を申し上げます。

平成22年10月16日
柏崎市教育委員会
教育長　小　林　和　徳

例　言

1　本書は平成22年10月16日～12月12日、平成23年1月23日～3月13日に開催の、柏崎市制施行70周年記念考古資料企画展「遺跡が語る西山の歴史」の展示図録として作成しました。
2　本書は、展示資料の全てを紹介しているものではありません。また、本書に掲載されているもの全てを展示しているものでもありません。
3　本書に掲載した資料は、出典を記したものを除き、柏崎市教育委員会・柏崎市立博物館が所蔵しているものです。
4　本書の編集・執筆は、柏崎市教育委員会教育総務課遺跡考古館職員が行いました。
5　展示・図録の作成について、下記の方々からご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。
　小熊博史　寺崎裕助　（財）柏崎市観光レクリエーション振興公社　柏崎市立博物館
　柏崎ふるさと人物館　新潟県教育庁文化行政課　西山ふるさと公苑
　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

柏崎市北東部の西山町地域は、柏崎平野から新潟平野へ至る途中に位置します。東西を曾地丘陵と西山丘陵に挟まれ、その間を別山川が鯖石川へ向かって流れています。西山丘陵の西側は日本海に面しており、海・山・川といった自然に恵まれた環境といえます。春の野山には雪割草やカタクリの花が咲き誇り、秋の田んぼは豊富な実りをもたらします。冬にはたくさんの白鳥が飛来して、羽を休めていきます。

歴史を振り返ってみますと、天智天皇の時代には「燃ゆる水（草生水）」が献上されたと『日本書紀』に記載されています。妙法寺の献上場では現在でも石油が自噴しており、「草生水まつり」が当時の献上行列の様子を今に伝えています。「物部神社」「御嶋石部神社」「石井神社」「多岐神社」は、平安時代にまとめられた『延喜式神名帳』にも記載された由緒ある神社で、多くの神話や伝説が伝えられています。

江戸時代、天明の飢饉の際には、一揆などの暴力による解決を求めず、話し合いで百姓の生活を守ろうと幕府に嘆願を行った百姓達の物語「天明義民伝」が伝わっています。明治時代には、石地の内藤久寛により油田の開発が行われ、西山油田でも石油が採掘されて、大きなにぎわいを見せていました。様々な歴史に彩られた西山町は、平成17年5月1日に柏崎市と合併し、新たな歴史を刻み始めています。

今回の企画展は、西山町地域の遺跡に着目し、地域の歴史を見ていきたいと思います。柏崎市の中でも、それぞれの地域ごとに異なった遺跡から、様々な地域性が浮かび上がってきます。郷土の歴史を、普段とは違う視点から見ていきましょう。

柏崎市上空から見た西山―山と海に囲まれた自然豊かな地域です。

御島石部神社

石井神社

多岐神社

二田物部神社

西山の延喜式内社

早春の野山を彩る雪割草

草生水献上行列

長嶺大池の白鳥

西山油田の様子

縄文時代 前期～中期

（6,000年前～4,000年前頃）

石地海岸近くの砂丘の上から、簡素な文様を付けた土器のかけらが出土しました。今から約6千年前の縄文時代前期の始め頃のものです。これが現在わかっている最も古い西山の住人の痕跡です。その後、徐々に人の活動は活発となっていったようです。遺跡の数も増えていき、西山のあちこちで縄文時代のムラの跡が見つかっています。

前期初頭

前期前葉

前期前葉

前期末

中期初頭

西山の火焔型土器と仲間たち

新潟県の縄文時代といえば火焔型土器が有名ですが、西山にもこの火焔型土器の文化が及んでいます。二位殿遺跡（大崎）や大津遺跡（大津）などの、海岸部に近い遺跡で多く出土しています。

大津遺跡の土器

大津遺跡の発掘調査は行われていませんが、田んぼや畑で多くの土器や石器が採集されています。縄文土器は縄文時代中期から後期のものが多く見つかっています。時には写真のようにほぼ全体がわかるようなものまで見つかります。（右：縄文時代中期、中左：縄文時代後期）

石地の縄文遺跡

海岸に近い石地の丘の上では、縄文時代前期から中期にかけての土器や石器が多数見つかっています。縄文時代の土器は時期ごとに形や文様が大きく変化していきます。

坪之内遺跡A地区の全景　竪穴住居　建物

坪之内遺跡の竪穴住居

竪穴住居内の石組み炉

竪穴住居から出土した土器

坪之内遺跡の土器

縄文時代中期のムラと土器

坪之内遺跡（坂田）では約4500年前のムラのほぼ全体を調査しました。10棟の住居が丘の中央を囲むように作られています。火焔型土器の流行した時期の終わり頃からムラは作られました。竪穴住居の中からはたくさんの土器や石器が出土しています。ほぼ完全な形で出土した土器もあります。この頃の生活は、狩りや採集で食料を確保していました。石のやじりを付けた弓矢で動物を捕まえ、石斧で芋などを掘っていました。クリやトチノミなどの木の実も重要な食料で、それらを蓄えておくフラスコ状土坑や、すりつぶすための石皿も出土しました。山の幸に恵まれたムラだったのでしょう。

縄文時代 後期〜晩期

（4,000年前〜2,400年前頃）

五日市の大池を囲む丘に野崎遺跡があります。約4000年前から2400年前までの縄文時代後期から晩期の土器が大量に出土しています。この期間、断続的にムラが営まれていたようです。土器を見ると大きな深鉢のようなもの、壷や急須のような形のもの、フタなど様々なものがありました。丘の裾のゴミ捨て場からは動物の骨や鹿の角なども見つかっています。

野崎遺跡の縄文時代後期の土器

野崎遺跡の
縄文時代晩期の土器

縄文土器の様々な装飾

縄文時代の道具・飾り・祈り

縄文時代には石や粘土で様々なものを作りました。特に、石は様々な道具の素材として用いられ、アクセサリーなども作られました。粘土も形を作りやすいことから、土偶や装飾品を作るのにも使われています。これらは、当時の生業や精神生活を考える上で重要な資料となっています。

坪之内遺跡の三角柱状石製品

縄文時代の石器には、何に使ったのか想像もできないものもあります。丁寧に磨いて三角形に仕上げています。

石のやじり（石鏃）

大津遺跡の周辺の田んぼや畑でこの石のやじりがたくさん拾われています。石を丹念に叩いて作ったやじりは実に精巧なものです。中には大きなものあり、これは槍の先に付けていたものと見られます。野山を駆け回る動物を、弓矢を持って追いかけ回していたのでしょう。写真は全て大津遺跡の周辺で採集されたものです。

石の斧

石斧には、打ち欠いて作った打製石斧と、磨いて仕上げた磨製石斧の2種類があります。打製石斧は主に土を掘るために使われました。磨製石斧は、木を切り倒したり、加工をするのに使われていたようです。写真は坪之内遺跡から出土したものです。

飾りと祈り

珠には、穴が開いているものと開いていないものがあります。穴があるものはヒモなどを通して身に付けていたのでしょう。左は坪之内遺跡から出土したヒスイ製のもので、他の3点は野崎遺跡のものです。

石斧を作る

砂田の多岐ノ脇遺跡から変わった形の石が出土しています。石は緑と白のコントラストがきれいな蛇紋岩というものです。人の頭ほどもある大きな石を磨いて溝状の刻み目を付けて、カツオブシのような形に切り分けようとしています。これは、大きな磨製石斧を作る途中のもので、特に色がきれいな部分を選んで切り取ろうとしています。実用の斧ではなく、まじないなどに使う斧を作っているものと考えられます。

土偶と耳飾り

土偶とは、粘土を焼いた人形のことで、体の一部をわざと壊して願いを込めていたとされます。多岐ノ脇遺跡の土偶は片手だけしか見つかっていません。粘土を焼いて作った耳飾りは、耳たぶに穴を開けてはめていたと見られます。

弥生時代

（紀元前10世紀頃～3世紀中頃）

柏崎市吉井の下谷地遺跡で弥生時代中頃の稲作をしていたムラの様子が明らかになりました。このころが米どころ新潟の始まりといってもいいでしょう。西山でも弥生時代中期の土器が少量ながら見つかっています。弥生時代のムラの様子が明らかになってくるのは弥生時代後期になってからです。水田跡は見つかっていませんが、肥沃な土地に根ざした特徴ある遺跡が出現してきました。

内越遺跡の竪穴住居

内越遺跡（内越）では弥生時代後期の竪穴住居が見つかりました。住居の中からは多くの弥生土器が出土しました。北海道・東北地方で縄文時代以来の生活を続ける人たちが使っていた続縄文土器も出土しています。遠方と交流を行っていた証と言えます。西山のおいしい米を食べにきたのでしょうか。

坪之内遺跡で出土したヒスイの勾玉は、新潟県内では最大級のもので、全国的に見ても大きなものでした。このような大きなものを持つことができる人は相当な身分であったと考えられます。しかし、地域を治めるような身分の人が暮らしていたムラは、今のところ見つかっていません。なぜ西山にこのような勾玉がもたらされたのか、大きな謎が残っています。

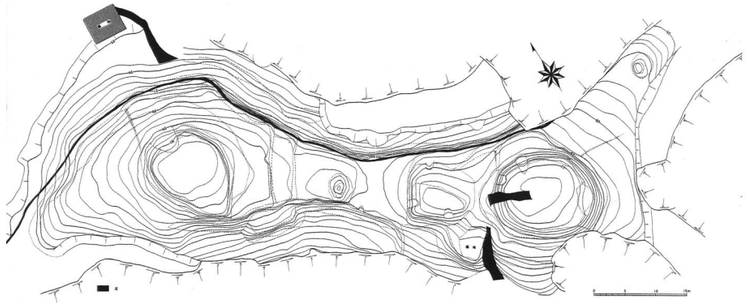
内越遺跡で出土した続縄文土器。弥生土器と違い、装飾が多く付けられています。

野崎遺跡の丘の上で深さ2m近くもある大きな溝の一部が見つかっています。溝の中からは弥生時代終わり頃の土器が出土しました。弥生時代の終わり頃、日本は「倭国大乱」と呼ばれる各地のクニ同士が争う戦乱の時代を迎えていました。戦いに備えてムラを丘の上に構え、周りを堀で囲っていたと考えられます。同様の堀をもったムラは刈羽村の西谷遺跡でも見つかっています。

古墳時代

（3世紀中頃～6世紀代）

曾地丘陵の麓には長さ32mの前方後円墳と直径18mの円墳からなる吉井行塚古墳群が見つかっています。古墳時代初め頃のものとみられています。西山地域では今のところ古墳は見つかっていませんが、この頃のムラが所々に営まれていました。



吉井行塚古墳群

高塩B遺跡の土器

高塩B遺跡は、石地海岸に近い砂丘上の遺跡です。住居跡などは見つかりませんでしたが、多量の土器が出土しました。出土土器の中には東海地方や山陰地方の影響を受けたものが見られます。越のクニと出雲のクニ等につながりがあったのでしょう。

ミニチュアの石製品（実物大）

2cmに満たない小さな石の製品です。左は勾玉、右は鏡のミニチュアと見られます。古墳時代後期の遺跡から出土しますが、何のために作られたのかわかっていません。

町口遺跡の土器

町口遺跡の溝

町口遺跡（坂田）は坂田川沿いの遺跡で、竪穴住居やムラの一部を囲む溝などが見つかりました。多くの土器も見つかっています。この頃、ムラ全体を囲う溝が見られなくなり、ムラの中でも特定の人の住居の周りが溝で囲まれるようになります。

畠田遺跡・宮ノ前遺跡の古墳時代後期の土器

畠田遺跡・宮ノ前遺跡の古墳時代の須恵器

畠田遺跡・宮ノ前遺跡（北野）は古墳時代後期のムラの跡です。畠田遺跡ではこの時期の竪穴住居が見つかりました。住居の床にはたくさんの土器が散乱しています。この頃、内側に炭素を吸着させた黒色土器や、朝鮮半島から技術が伝わったとされる新しい焼き物である須恵器が出現します。須恵器は遠く大阪や東海地方などからもたらされたと見られますが、新潟県では貴重なものでした。西山の当時の遺跡からはこの頃の須恵器がたくさん出土しています。

飛鳥・奈良・平安時代

（7世紀頃～12世紀終り頃）

飛鳥時代以降、大和朝廷は中央集権国家の建設を進め、全国に国郡制による行政組織を作り上げていきました。西山が属した国や郡は時期により変化し、9世紀の初めころに越後国三嶋郡多岐郷となったとされます。長岡市の八幡林遺跡から「多岐郷戸主物部五百足戸口物部」と書かれた木簡が出土しています。古代の有力氏族である物部氏がこの地域で活躍していたことを物語る資料といえるでしょう。

西山の中央を流れる別山川沿いには、当時の国道とも言える北陸道が通っていました。地方支配の重要な地域であるとともに、交通の要衝としても重要な位置を占めていたのでしょう。このため、西山でも新田の開発が活発に行われたようで、これを主導して力を蓄えたとみられる人たちが住んだと見られる大きな屋敷をもつムラがあちこちに現れます。このようなムラでは、越後国や佐渡国で焼かれた須恵器や土器とともに、遠方で生産された高級な焼き物や、文字を書いた焼き物などが出土します。豊富な生産力と交通の要衝を背景に、多くの文物がこの地にももたらされたのでしょう。坂田の木造聖観音菩薩立像も平安時代に作られたものです。

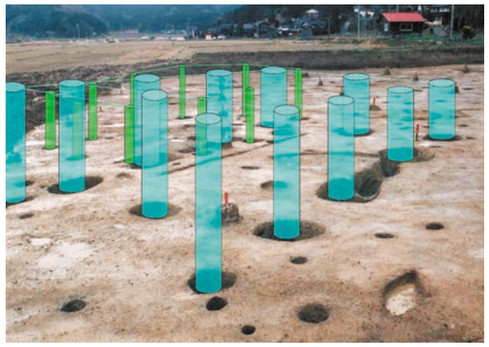
八幡林遺跡出土の木簡

和島村教育委員会一九九四『八幡林遺跡』より

井ノ町遺跡の全景

井ノ町遺跡

海岸部に近い井ノ町遺跡では、建物や土器がたくさん見つかりました。平安時代の建物は、大きさは小規模なものですが、太さ30cmほどもある立派な柱が使われていました。建物のすぐ横には小さな川が流れていました。この川の中からは大量の土器が出土しました。奈良時代の土器もたくさん出土しています。この時代の開発は海岸部に近いところでも活発に行われていたようです。

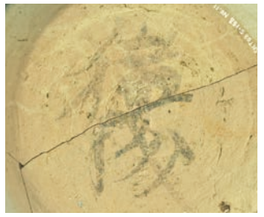


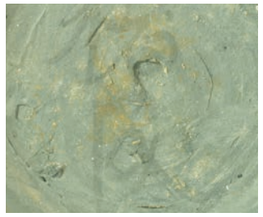
井ノ町遺跡の建物（柱はイメージ）

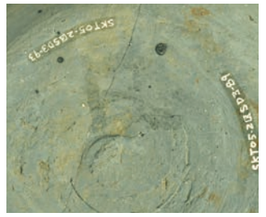
井ノ町遺跡の土器

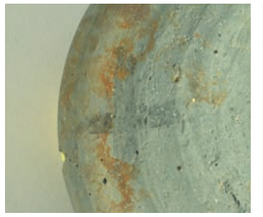
坂田遺跡の墨書土器

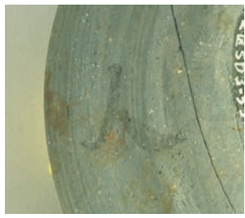
この時代は文字の使用が普及していきます。文字は文書を書くだけではなく、様々な状況で使われました。坂田遺跡では須恵器の碗に様々な文字や記号を書いています。人名のようなものもありますが、同一の文字が多いことから、まじないなどに使われたものと考えられます。







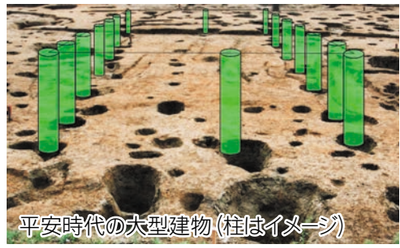




北野の開発領主の居館・宮ノ前遺跡

北野の宮ノ前遺跡では、当時としてはかなり大型の建物が見つかりました。建物の横には馬小屋と見られる建物も並んでいます。ゴミ捨て穴からはほぼ完全な形で捨てられた土器のお碗がたくさん出土しました。また、東海や美濃で焼かれた灰釉陶器もたくさん出土しています。高級品である灰釉陶器はいずれも小さな破片となっていますが、地元で作られる土器はほとんど壊れていないのに捨てられています。大きな井戸からはたくさんの木製品も出土しました。

宮ノ前遺跡の平安時代の屋敷



平安時代の大型建物（柱はイメージ）

平安時代の土器の出土状況

美濃で焼かれた灰釉陶器

平安時代の須恵器と土器

鎌倉・室町時代

（12世紀終り頃～16世紀）

平安時代の終わり頃から武士が台頭するようになり、越後国は木曾義仲や源頼朝などの武士の支配を受けるようになりました。鎌倉時代になると、幕府の執権に近い北条氏の領地になり、代官ともいえる地頭を現地に配属します。実際に西山の支配を行った武士の名前は伝わっていません。この頃の在地の支配者は、農地に近く、道や河川の近くといった交通の要衝に堀をめぐらした屋敷を構えていました。

続く室町時代から戦国時代にかけては、越後国は上杉氏が支配するようになります。上杉氏の家来は、各地に四角く堀をめぐらせた館で生活をし、領地の経営を行っていました。坂田の町口遺跡では鎌倉時代と室町時代の支配者の館のものとみられる堀の一部が見つかっています。

鎌倉時代以降の遺跡からは、国産の焼き物のほかに、中国などから輸入された焼き物が出土します。遺跡に住んでいた人の階層により、輸入品の質や量などに違いが見られ、館などからは特に高級品が多く出土しています。また、木の桶や箸、漆塗りの椀や皿、鉄製の刀子等の出土量が飛躍的に多くなります。特に漆塗りのものには、精巧な模様が描かれたものなどが見られます。

西山を支配していた人と支配されていた人のムラの違いが顕著になっていきます。

宮ノ前遺跡の焼き物

平安時代に開発が進んだ北野は、鎌倉時代や室町時代になっても肥沃な耕地が重要な位置を占めていたのでしょう。瀬戸焼や輸入品の青磁や、漆の椀や皿を持つムラが営まれていました。妙法寺街道の入り口に位置することから、交通の要衝としても重要な位置を占めていたのでしょう。

宮ノ前遺跡の漆塗りの椀

井戸の底に据えられた桶

上沢田遺跡の下駄

比較的時代が新しいこともあり、木や鉄でできた製品が良好な状態で残っていることがよくあります。下駄は他の遺跡でも出土していますが、なぜか片方だけが出土します。漆塗りの椀や皿は、黒漆の上に朱漆で模様を描くものも多くあります。

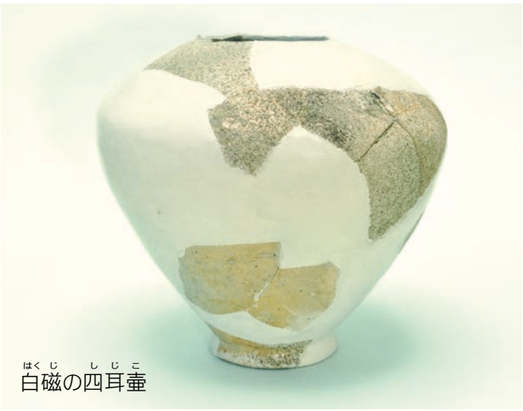
町口遺跡の全景（鎌倉・室町時代のほかに古墳時代のムラも見つかっています）

室町時代の堀

鎌倉時代の堀

坂田地区では広い範囲に鎌倉時代から室町時代にかけての遺跡が広がっています。中でも町口遺跡では、立派な堀を備えた館が作られました。館は戦国時代になって整備されたようです。他の遺跡に比べて、東海地方などの遠方で焼かれた国産陶磁器や、中国から輸入されたものが多く出土しています。茶臼は室町時代以降のものとみられます。一般的な村落では出土しないものが多く出土しています。

国産の焼き物



白磁の四耳壺

中国から輸入された品々

茶臼（抹茶を挽く臼）

青白磁の壺

製鉄遺跡

鉄を作る・鉄から作る遺跡

西山地域では、あちこちでカナクソと呼ばれるものが出土します。これは、砂鉄を溶かして鉄を作った際に生じる不純物が固まったもので、過去に製鉄遺跡があったことを物語るものです。別山後谷の深い谷の奥で、鎌倉時代の製鉄所が見つかりました。出土した鉄滓は30トン近くありました。砂鉄を溶かすためには大量の炭が必要となりますが、この炭を焼く窯は60基も発見されました。このような製鉄遺跡は内越や後谷、浜忠、大津など、西山のあちこちで見つかっています。砂鉄と、燃料になる木を大量に手に入れることができる西山の地は、鎌倉時代の大製鉄地帯になりました。

また、鎌倉時代から室町時代の館や村からは、鍛冶や鋳造に関係する遺物が出土します。奈良・平安時代の軽井川南遺跡群では、製鉄から鍛冶・鋳造までを行っていましたが、鎌倉時代以降は村の中で鉄から様々な道具を作っていたようです。

宝童寺A遺跡の全景―斜面の大部分に木炭窯の跡が残っています

宝童寺B遺跡の木炭窯

窯の中に残された炭

炭は、丘の斜面に掘った横穴状の窯で焼かれました。天井が崩れて取り出せなくなった炭が残っていたりもします。窯の中から、鍬の一部も出土しました。このような道具で窯を掘っていたのでしょう。

製鉄の羽口　鍛冶の羽口　坩堝

製鉄の道具

羽口は製鉄炉や鍛冶炉などに空気を送り込む管の先端です。炉の温度は1200℃以上にもなるので、溶けにくいように分厚い土管状のものを使いました。製鉄に使うものは、鍛冶のものより大きく作られます。坩堝は金属を溶かすときに使いました。

戦国時代

（15世紀後半～16世紀）

戦国時代になると、あちこちの山に城が造られるようになりました。山の頂上などに平らな場所を造成し、尾根を断ち切るように堀を作ります。西山では、二田城・高内城・鎌田城・大崎城などの大規模な山城のほかに、小規模な山城が点在しています。刈羽村の赤田城は上杉家の重臣である斎藤氏の居城でした。西山の山城の主ははっきりとわかっていません。しかし、二田城などは県内でも大規模な山城で、郭や堀の造成が大がかりであることから、有力な武将がこもっていた可能性があります。

実際に戦争に巻き込まれた城もありました。甲田城は唯一、発掘調査が行われた山城です。調査の結果、たくさんの郭や堀が見つかり、焼けた米や粟、豆などが出土しました。生活のための道具も出土しています。土器などの年代は、御館の乱に近い時期と考えられます。御館の乱では出雲崎町の小木ノ城をめぐって戦闘が行われているので、これに巻き込まれたのかもしれません。

大崎城の全景

山の麓からも確認できる大きな堀が尾根に作られています。

甲田城から出土した焼き物

塚

西山では140基以上の塚が見つかっています。塚とは、土を盛り上げて小さな山のようにしたものです。墓であったり、道しるべであったり、お経を埋納したものであったりします。大きなものは、直径10m前後にもなります。狐山塚群（西山）は過去に盗掘されたあとがありますが、その周辺からは宝篋印塔や五輪塔などの石像物や、骨壺と見られる珠洲焼の壺が出土しているので、お墓であったと考えられます。

狐山塚群の宝篋印塔と珠洲焼

灰爪の塚

灰爪の供養塔

1968（明治元）年、大政奉還により成立した新政府軍と旧幕府勢力による戊辰戦争が起こりました。新潟県もこの戦争の激戦地となります。この年の5月、灰爪に陣を構えた水戸藩を中心とした軍勢に対し、新政府軍は大砲を連発しながら切り込みを行いました。この戦闘で旧幕府軍側は49名の戦死者を出すこととなります。灰爪の塚群は、この時の戦死者を埋葬した際にできた骨塚と言われています。また、付近の畑からも戊辰戦争の犠牲者の骨が出土しました。平成元年に、地元と茨城県内の有志の方々により供養塔が建立されました。